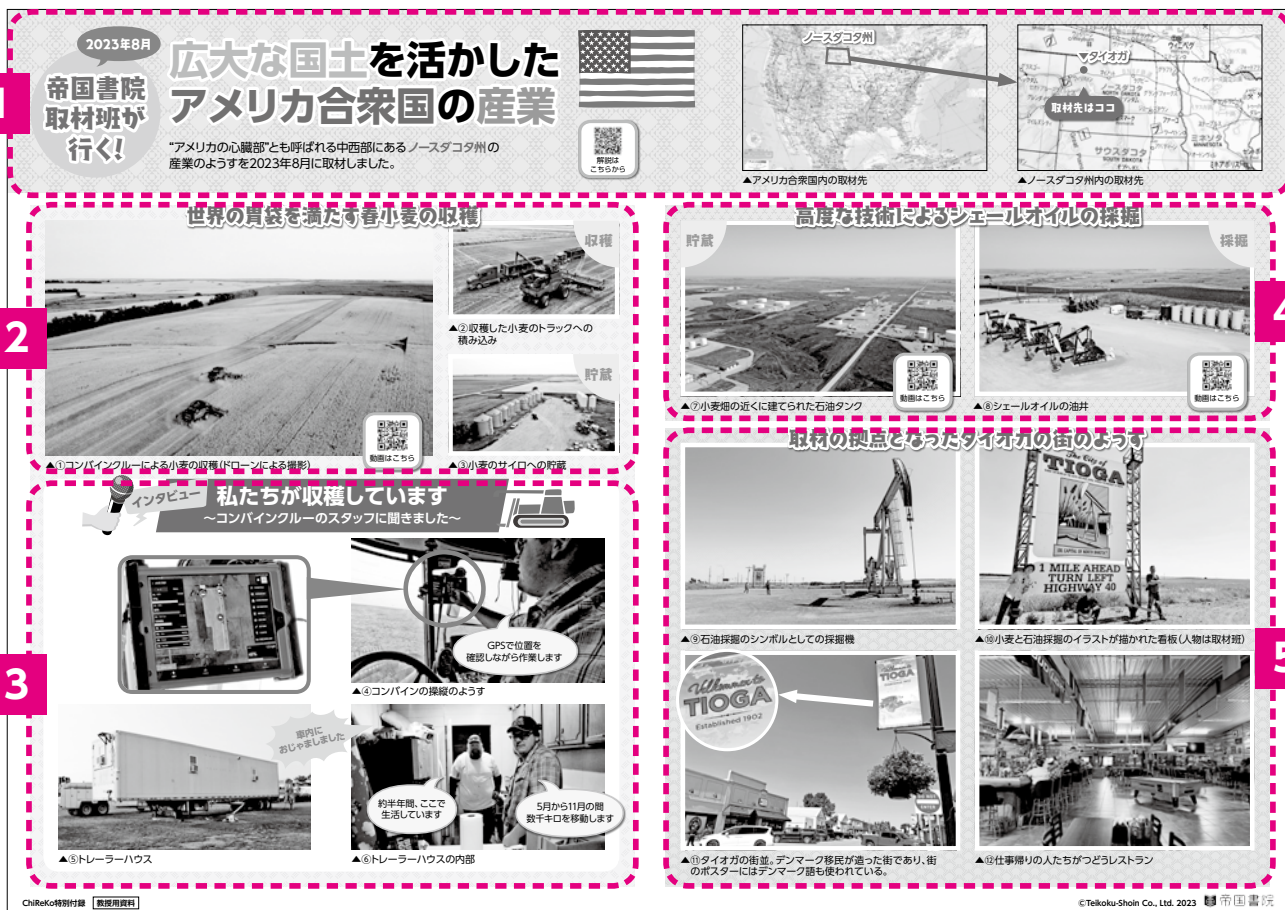


帝国書院では、地図帳や教科書の編集者を中心に取材班を組み、2023年8月16日から8月24日まで、アメリカ合衆国の取材を行いました。その取材成果の中から、今回はアメリカ合衆国の産業を中心としたポスター資料を作成し、お届けいたします。

別途お届けのポスター↓とあわせてご覧ください!



1 広大な小麦畑を目指して

今回、我々取材班は世界的な小麦生産地帯であり、春小麦の栽培地のノースダコタ州を訪問し、大規模に行われる小麦の収穫のようすや、企業的農業の現場をコンバインクルーの生活とともに取材した。アメリカ合衆国ならば交通の便も良いだろうと思っていたが、取材地はデンバー国際空港で飛行機を乗り継ぎ、日本から丸1日かけてようやくたどり着くことができる、アメリカ合衆国でも“田舎”の土地だった。しかも、小麦の収穫時期は気候に大きく左右されるため、いつ頃、どこに行けば収穫のようすを収めることができるのかも、1週間前にならなければわからないという状態だった。しかしながら、現地のコンバインクルーを経営するご家族やコーディネータの方の協力のおかげもあり、内容の濃い取材を行うことができた。

2 広大な畑で行われる春小麦の収穫作業

我々が取材を行ったノースダコタ州ウィリントン近郊のタイオガという街は、カナダ国境まで車で1時間ほどの所に位置し、周囲には小麦や菜種の広大な畑が広がっていた。ちなみに、私たちが料理する際に使われることもある「キャノーラ油」の原料となるキャノーラ種の発祥はこのあたり(正確にはカナダ)であり、小麦と同じくらい盛んに栽培されている。

この地域での小麦の収穫は、例年、8月から9月にかけて行われている。盛んに収穫は行われているはずだが、周囲の広大な農地のなかでは、一見すると収穫がどこで行われているのかわからない。遠くに土煙が上がっているのが時々見えるが、その場所をよくよく見てみるとコンバインが動いているのがわかる。土煙だと思って見ていたのは、

実は巨大なコンバインが吐き出す刈り取り後の不要物(茎など)だったのである。これだけでもアメリカ合衆国の農業の大きさを実感できる瞬間となった。この広大な畑を、所有者である農場主自らがすべて収穫することは困難であるため、収穫を専門に行う会社と契約を結び、収穫を依頼している。

取材を行った会社は、今回の取材中、2台のコンバインと収穫した小麦をカントリーエレベーターまで輸送するトラック2台で収穫を行っていた。ちなみに、収穫に使用するコンバインは、コンバインよりも大きなトレーラーに載せられ、さまざまな機材を載せているトラックなどと一緒に、前の収穫地から数百キロの道のりを経て、この土地に到着した。小麦畑の中の道を、隊列を組んで移動するようすはまるでキャラバンのようだった。

収穫が始まると、人の身長よりも大きい巨大なコンバインカッターで小麦が刈られていく。そして、小麦の穂だけがコンバイン内のタンクに貯められ、茎などの不要物は後部から吐き出される。コンバイン内のタンクがいっぱいになると、コンバインは輸送トラックまで移動し、タンク内の小麦を移し替え、再び畑に向かう。そのため、コンバインは絶え間なく畑と輸送トラックを行き来していた。

実はここでトラブルが発生していた。本来ならば、これらの車両のほかに、各コンバインを巡りながら収穫した小麦を集め、輸送トラックまで運ぶ役割を担う、グリーンカートという車両があるのだが、これが故障で使えなくなってしまった。そのため、コンバインはいちいち輸送トラックまで小麦を積み替えに行かなければならなくなっていた。畑が広いだけに、このような故障は大きなロスにつながると、素人ながらも感じる事ができた。しかしながら、彼らも慣れたもので、取材の翌日には部品が届くので、自分たちで修理を行い、グリーンカートも作業を再開するのだと言っていた。コンバインクルーの仕事は収穫だけでなく、農場の所有者との交渉や車両のメンテナンスなど、多岐にわたっていることを伺い知ることができた。

3 コンバインクルーの仕事と生活

今回、取材を引き受けてくれた会社を運営するご家族は、2001年に会社を立ち上げ、現在では息子さんもこの仕事に就いている(写真④のコンバインを運転する方は息子さんである)。大きい会社に属する社員のようなイメージがあったが、経営自体は家族で行っており、この家族がコンバインの運転や車両をメンテナンスする人を雇っている。総勢11名のスタッフからなる会社は、半年の間、アメリカ合衆国のプレーリー地域を中心に、小麦や大豆を収穫し

ながら移動する。その間、スタッフはトレーラーハウス(大型トレーラーを改造した住居)に住み込みで収穫作業を行うため、その中にはキッチンからトイレ、シャワーまで付いている。また、この地域ではトレーラーハウスが長期にわたり駐車できるスペースが確保されており、家賃=駐車料金を払えば、水や電気は備え付けの設備から引くことができるようになっている。

会社を運営するご家族の家は、テキサス州のローガンという街だが、春に収穫の仕事が始まり、11月まで家にはほとんど戻らずに収穫を続ける。穀物は人間の都合で収穫の時期を待ってはくれないので、その期間は土日も含めて休みはほとんどない。唯一休めるのは雨が降った時であるが、ゆっくり休めてよいとはならず、収穫スケジュールを狂わせる難敵なのだそうである。昨今は干ばつも問題となっており、今回、本来ならばモンタナ州に行く前にコロラド州でも収穫を行う予定だったが(下記の地図参照)、干ばつにより小麦が収穫できなくなり、予定が変わったと言っていた。気候変動は彼らや農家の収入に直結しているのである。

コンバインクルーの一日は、朝8時ごろに起床し、身支度を行ったのち、居住地からその日に収穫を行う畑に向かう。畑に向かう途中で、朝食を調達するためにガンソリスタンド併設のコンビニエンスストアに寄っていたが、そこでコンバインを運ぶトレーラーのメンテナンスも行っていた。朝食を作ることはほとんどないようで、この店で買って済ませていた。ちなみに、我々も利用したが、日本でいえば小〜中規模のスーパーマーケットほどの大きさがあり、食品だけでなく、服や工具、釣り具まで売られていた。

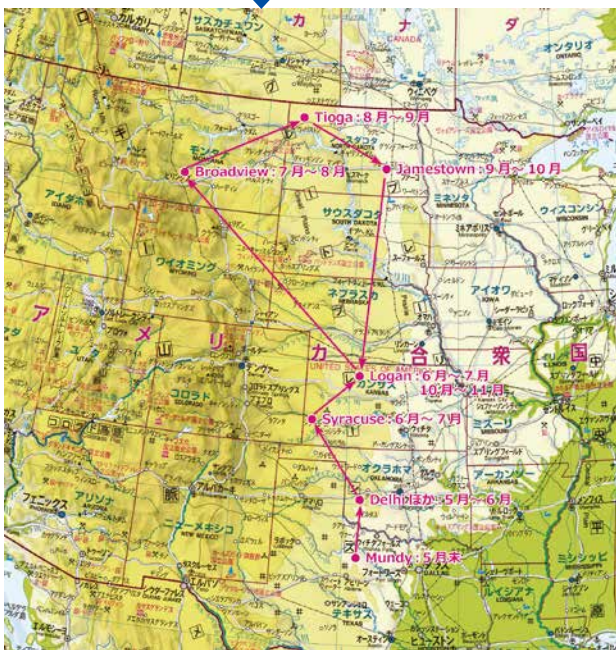
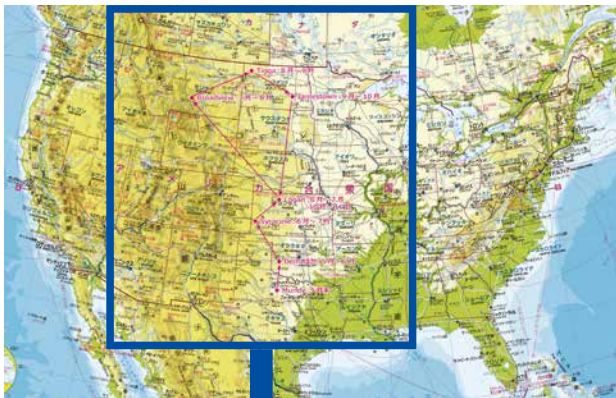
取材を行う中で驚いたのは、収穫を行う畑の正確な場所は、農場主が生育状況や天気の状態から当日に判断するため、コンバインクルーも当日にならないと刈り取りの正確な場所はわからないということだった。そのため、コンバインが畑に向かうようすの撮影を、コンバインが見えなくなるまで続けていた我々は、それらのコンバインがどの畑に向かったのかわからないというアクシデントに見舞われた。一時、我々は広大な畑の中で取り残され、迷子のようになってしまったのである。幸いなことに、前日に「この辺りの畑を収穫するかも」ということは聞いていたので、その場所に向かうと、数分後にコンバインや輸送トラックが現れ、ほっと胸をなでおろした。そして、収穫が始まると、巨大なコンバインが広大な畑で小麦を刈っていくようすの撮影を始めることができたのである。

なるべくロスが生じないよう、コンバインは位置を確認し合いながら収穫を進める。そのため、コンバインどうしの位置は専用のアプリを用いて確認する。タブレットのディ

スプレイには、GPSでコンバインの位置情報だけでなく、各コンバインのタンクの積載量や、畑の何%が収穫を終えたのかも表示される。非常に優れたアプリであるため、アメリカ合衆国の多くのコンバインクルーが使用しているとのことだった。また、昼食はどうするのかと聞くと、朝、コンビニエンスストアで買ったレーシヨンやパンなどを、操縦しながら食べる、もしくは食べないこともあるとのことだった。

収穫期の彼らの生活は過酷であると感じることが多かった。しかしながら、彼らは自分たちの仕事を心底誇りに感じている。それは、自分たちが収穫した穀物が、日本をはじめ世界の人々の食卓を支えていることがわかっているからである。そのため、我々の取材にも快く対応してもらえた。我々自身も改めて地球温暖化やフードロスなどに対して配慮することの大切さを感じた。

● 半年近くにわたる収穫の移動ルート



4 小麦畑の中で行われるシェールオイルの採掘

ノースダコタ州は世界的にも大規模な小麦地帯の一つだが、この地域には世界的にも有名な産物がもう一つある。それが「石油」である。2010年ごろからアメリカ合衆国やカナダで原油の産出が増加し、「シェール革命」とよばれる現象を引き起こしたが、それを引き起こした地域の一つが今回の取材地であるノースダコタ州である。

もともと小麦などの畑が広がっていたこの地域で原油の採掘が始まったために、原油を汲み上げるポンプが設置された油井が、畑の中にたくさん点在している。油井に常駐する係員はおらず、ポンプだけが動き、余剰ガスを排出する煙突からは炎が立ち上がっていた。今回、我々は夜間に飛行機を使って現地入りしたが、煙突から立ち上がる炎は、上空から見ると炎と判別できず街灯のように見えたため、規模の大きい街があると考えていた。飛行機の高度が下がり、それらがすべて油井から立ち上がる炎とわかった時は、驚きとともに「シェール革命」のことが想起された。各油井から集積された原油を貯蔵するタンクも畑の中につくられており、そこからは出荷のためなのか、大型のタンクローリー車が入り出していた。

取材した石油貯蔵施設のほかに、新たな施設が畑の中に建設されている現場も見ることができた。シェールオイルは環境への負荷も大きく、原油価格も一時のように高騰はしていないため、生産は下火になってきているのではないかと思っていたのだが、このような光景を目の当たりにすると、まだブームは衰えていないことを実感した。

また、地元住民やこの地域に働きに来ているコンバインクルーなどの人々は、シェールオイルを害とは捉えず「恵み」と言っていたのは印象的で、視点を変えて物事を捉えることの大切さも実感した。

5 タイオガの街のようすと垣間見えた暮らしぶり

今回の取材の拠点となったタイオガの街は、地図帳にも載っているウィリントンから車で1時間ほど北東に走った所に位置する。人口は2,000人程度しかないが、古くから盛んな小麦の収穫と近年では石油で潤っている街である。そのため街の入り口にある標識には、小麦と原油を汲み上げるポンプのイラストが大きく描かれている。ちなみに、この標識のある広場にも原油を汲み上げるポンプがあり、初めはオブジェだろうと思っていたが、しっかりと稼働しているのには驚かされた。原油を汲み上げるポンプはほかの地域でも見たことがあるが、こんなに近づいて見ることができたことは初めてだった。ポンプのまわりには柵が

設置されておらず、この地域の治安が乱れていないことを感じた。

タイオガで働く人々にとって、これらの産業は誇りであるとともに生活の糧でもある。特に原油生産の影響は大きく、ウィリストンの人口はここ10年で倍増している。タイオガでもその影響は垣間見え、人口規模の割には大きなホテルが3~4つもあり、それらのホテルの一つに宿泊していた我々も、石油関連施設で働いていると思われる作業員やスーツ姿の人をみることができた。

タイオガのメインストリートは200mぐらいしかないが、そこに飲食店や銀行、自動車や耕作機械の部品工場などが軒を連ねている。メインストリートらしく街灯もあり、花の装飾や街の垂れ幕がかかっていた。その垂れ幕に注目すると、「Velkommen」の文字を見つけたが、デンマーク語の表記であった。この土地は1902年、ニューヨーク州に住んでいたデンマーク系移民が、ホームステッド法(自営農地法)を活用して入植することで開拓された土地であるとの説明を受けた。現在ではデンマークの入植地であることの面影はほとんどみることができないが、移民の国、アメリカ合衆国の歴史を物語る垂れ幕である。

タイオガの街にはレストランは3軒しかないが、そのうちの1軒はいかにもアメリカ合衆国のダイナーのような雰囲気を出しており、店内にはバーカウンターやビリヤード台、ダーツ台などがある。仕事帰りにビールを片手に語らう人や娯楽を楽しむ人が訪れていた。写真には写っていないが、このレストランにはステージもあり、大統領選挙などの際には演説も行われるようである。そのステージには共和党のトランプ氏の旗が掲げられていたのは印象的だった。もう一つの外食店であるメキシコ料理店のオーナーは、もともとロサンゼルスに住んでいたが、この地域のほうが景気が良いということで、家族ぐるみで移住してきたようである。オーナーは、今(夏)よりも気温が-20℃くらいまで下がる冬の方が儲かると話していた。厳冬期は気温が低いので、その期間に働く人には、特別な手当が出るということである。土地柄、とても面白い話を聞けて盛り上がっていると、帰り際に「君ら日本人なんだろう。日本食のお店を出しなよ。今だったら競争相手がいないから儲かるよ!」と笑顔で語りかけてきた。これもアメリカンドリームなのだろうか、などと考えなくもないシーンだった。